

アダム えっ？ そりゃそうだよ、この上もなく。そしてこ  
うやって考えているとき、次のすばらしい——  
リリット あんた、幸せっていうわけね、坊やちゃん？  
アダム うん、そうだ！ しかし、もちろん、ものすごく幸  
せだよ！ そりゃ、もう、気が狂いそうなくらい！

— 幕 —

### 第三景

同じ風景が喜びの照明のなかに見える。舞台奥右手に  
はアダムの掘った小屋。

アダム（あくびをする）うっへー、わたしは幸せだ！ リリッ  
トはかわいらしい女だ。人が目を覚ます——アダム、あん  
た、あたしを愛してる？ 外に出る——アダム、いつもど  
こへ駆けていくの？ わたしが何かを創りたくなる——ア  
ダム、あたしにキスしてよ！ わたしが横になり、眠ろう  
とする——アダム、あたしが好き？ 好きだとも、かわい  
子ちゃん、いつどこにしようとも、好きだよ！（あくびをす  
る）人間がこれほど際限もなく幸せになれるなんて、わた  
しでさえ想像もしていなかった。あははは、こいつは中毒  
になりそうだ！

そうだ、ここに否定のカノンがすえてあったのだ。わた  
しはここに穴を掘ってそいつをうまい具合に隠しておいた  
んだ。リリットはかわいい女だ。しかしあいつがこれを  
やってみんとも……遊び半分に、それとも好奇心からか  
……そんなわけだな！ それともわたしは自分で発射しな  
いともかぎらない。わたしがこんなに幸せだとしてもだ。  
たしかに、それは大いにありうる。たとえは、まさしく、  
わたしがこの上もなく幸せだからこそ、わたしが発射する

連れてくるのだ。

残念ながらリリットは議論を好まんな、いや、やつぱり  
彼女は寝かせておいて、先を書こう。「黄金の時代は拘束  
されない——」（飛び上がる）なんてこった——わたしには  
そのもう一人のやつを創造することができはるはずじゃない  
か！ リリットが目覚まさないうちに、そいつをとつくと  
完成できるだろう。そのあとでリリットには山から来た  
か、天からおつこつて来たとか言えはいい——（土の塊に向  
かって膝をつく）こいつはいい考えだ！ 自分の徒弟、自  
分の使徒を創造する。それはわたしを理解する最初の人間  
となる。それは、かつてあった思想家のなかでも最大の思  
想家であり、最も大胆な精神の持主となる……とまあ、当  
然、そういうものとなる！

やがて、わたしよりも賢いと思ひ込むようになる！ い  
や、いや、きみい、それはいかんと思うがな。まあ、きみ  
がわたしのようになるならそれでよしとしよう。寸分たが  
わず、わたしのようになる。わたしのように思索的で肯定  
的に。すべての点で、わたしに肩を並べよう。ただし、わ  
たしは主人で親方となる。なぜなら、わたしは、いいかね  
世界を否定したし、「創造の土」をもっているのはわたし  
だからだ。それに、否定のカノンだ。だから、おまえはわ  
たしの精神的相棒になつてくれ。

おまえの外見はわたしと同じに、そして、わたしとして  
考える。おまえは「アルテル・エゴ」(Alter Ego)もう一人  
のわたしになる。だから、われわれ二人がいれば、あらゆる

ことだってありうるだろう。あれはここに永久に埋めてお  
かなければ。楽園の生活のはじまりだ。（顎が外れそうなほ  
ど、大あくびをする）さて、また、少しばかり創造をせんと  
いかな、何にするか？

——いまは眠っている、リリットちゃん、愛しいやつ。  
ちっちゃな子どものように眠っている。そのあいだに、創  
造されるはずの黄金の時代のわたしの基本原理を見ておこ  
う。（すわり、手帳を引っ張り出す）第一巻、第一章、第二節、  
なんだ、わたしはまだこの先に手をつけてないのか？ わ  
たしがこんなに幸せだったせいなのだ。そうすると——  
なんとなく、リリットの気に入らなかつたのだな。わたし  
が彼女の前でこれを書きはじめると、口をとがらせて言う  
だろうな。あんたわたしが好き、アダム？ ああ、好きだ  
よ、ああ、こん畜生、好きだよ！ こんなんじや、人間、  
気が狂わないではいられまいよ！

さてと第二節、「黄金の時代は束縛されないだろう——」  
いったい何に？ ここでわたしはやめたのだ。何者によつ  
ても束縛されない、それは当然だ。わたしの原理以外の何  
ものにもだ。いったい、どんな原理だったかおもいだせた  
らなあ。（額をつつく）さあ、どうだ？ 何も思い浮かばん  
のか？ こん畜生、なんだか頭のなかが空っぽになつたよ  
うだ。せめて相談をする相手が誰かあればなあ！ 人間は  
議論しているうちにいろんなことを思いつく！ 議論なし  
には創造することはできない。おまえが言い負かす誰かが  
いなければならぬ。そうとも。しかしどこからその男を

る世界のなかで最良のものを創造するのに十分だ。創造の土よ、わたしと同等の能力を有する男を造り出せ！（土に息を吹きかける）友よ、立て！

アルテル・エゴ（身を起こす）あやややや！ ぷふっ、ぷふっ、ぷふっ！ てへへっ！ とうへへっ！ こりや、ひどい！ アダム やあ、いらっしやい、友よ！ わたしはおまえを、わたしの姿、形に似せて創造した。

アルテル・エゴ ペっ、ペっ、ペっ！ ほんとだ、嘘じゃない、わたしの口のなかには泥でいっぱい！ ぷっふ、こいつはいい思いつきだ、人の口のなかに泥を詰め込むとはね！ これはなんかの衛生処理ですか？

アダム すまんな、だが、おまえさんを創造するのに、土を使わなかったとしたら、おまえさんを何から創ればよかつたというのかね？

アルテル・エゴ じゃあ、まえもって手を洗っておくべきだったんじゃないのか？ 土を消毒するとかしたか？ しない？ ほう、それは恐れ入ったな！ 創造するというのは、不純物を排除もせずに、創造するということか！

アダム すまんな、わたしだってどのように創造するか知ってるつもりだがな！

アルテル・エゴ わたしもだよ、きみい、わたしもだ。創造は近代的な原則を守って、無菌状態で、ゴムの手袋をして行われなければならない。でなきや、そんなものは素人仕事で、とても創造なんて言えたもんじゃない！ ちえっ！（見回す）なんだい、あまりたくさん造ってはいないな。こ

アダム 待って、おまえはなんにも理解しちゃいないんだな。世界は最初から創造されなければならない。

アルテル・エゴ はじめからか！ そしてそれは助手ではなく、よりよって蚤からときた。なあ、きみい、もしわたしが世界を造るとしたら、まず最初に、世界創造研究センターというのを造りたい。

アダム それこそまさに古い文明だ！ 君、それはな、とうの昔にもう克服されている！ いまではまったく新しい世界の創造は、まったく新しい、単純で自然な土台の上においてはじめられる。そういうことだ。黄金の時代、わかるか？

アルテル・エゴ じゃあ、どこにその新しい土台はあるの

アダム 手帳のなかだ。待て、いますぐ、それをおまえに読んで聞かせよう。

アルテル・エゴ ブハッ、理論に計画か！ そんなものがないになる？ その新しい世界というのを、実際に実現させて見せてくれ。さあ、何を創る？ また蚤か！

アダム それは違う。わたしはもうはるかにたくさんものを創造した。

アルテル・エゴ たとえば、なんだ？

アダム たとえば……たとえば、わたしの妻のリリットだ。アルテル・エゴ 女房を作ったのか？ こりやどうだい！

アダム そんなものがどうして新しいものになるのだ？

アダム おまえはまだ彼女を見ていない。そりやあ、もう、

れが、なにかこう、世界だともいうのか。ここにや、まるつきり、なんにもなしじゃないか！

アダム わたしは仕事をはじめたばかりなんだよ、相棒。世界はまだ完成していない。

アルテル・エゴ はあ、まだ完成していないか！ そして人間は千年も、よりよき世界の到来を待つというわけか、え、そうなんだろう？ そんなことのためにわたしを呼び出すのは勘弁してくれよ、きみい。あるものは在る。嘘はつかない。ややっ、なんだ、おれを咬んだのは？

アダム たぶん、蚤かなんかだろう。

アルテル・エゴ 蚤だつて？ どつから蚤なんかが出てきたのだろう？

アダム 要するに、蚤は……ほこりから生まれると言うじゃないか、知らんのか？

アルテル・エゴ 馬鹿ばかり。そんなのは婆さんどもの迷信だ。蚤はほこりからは生まれません。でも、地球上に蚤がいるというのはスキャンダルだぞ！ どの馬鹿が蚤なんかもってきたんだ？

アダム それは、ただのちよつとした実験だった。いわば科学的言葉遊びというか、それ以上の意味はなかった。

アルテル・エゴ やれやれ、実験か！ 何かもつと気の利いた実験はできなかったのか？ なんかこう、機械工芸的なものとか？ それとも血清学研究所とか？ ところが、そのお馬鹿さんときたら、こともあろうに、蚤の創造からはじめやがった！

かわいい女だ。

アルテル・エゴ そんなもの、新しくもなんともないじゃないか。

アダム 彼女と一緒にいると、わたしはものすごく幸せを感じる。

アルテル・エゴ それだつて、新しくはない。彼女はどこだ？ そしたらわたしは彼女を見に行く。

アダム そつとしておけ、彼女はいま眠っている。

アルテル・エゴ がおまえに何か関係あるのか？ わたしだつて彼女にたいして、おまえと同等の権利があるはずだ。

アダム そんな権利は願ひ下げにしたいな！ 彼女はわたしの妻だ。それとおまえのか？

アルテル・エゴ そんなこと、どうでもいい。婚姻関係なんてとくに無効だ。

アダム 誤解のないように言っておくが、わたしの婚姻関係は有効なのだよ。

アルテル・エゴ じゃあ、それはなんらかの新しい世界のものでなければならぬのじゃないか？ おまえさんにはあつて、わたしにはないという権利を正当とみなすために、その点をよく検討してみたいものだな！

アダム 大きな声を出すな！ 彼女が目覚ますじゃないか！

アルテル・エゴ どうしてわたしが大声を出してはいけないのか、そのわけを知りたいもんだな！ おまえさんは、わ

たしが誰かからの命令を受け入れると思っているのか？  
 そうなったら、なおさらのこと叫んでやる。恥だ！ 死  
 ね！ こん畜生！

リリットの声 アダム！ アーダム！  
 アダム ほら見る、起こしてしまっただじゃないか。——はい  
 よ、おまえ、わたしはここだよ！

アルテル・エゴ（急いで服の汚れをたく）なんか、ブラッシ  
 みたいなものもってないか？ おまえさんはもうちよつと  
 ましな服を着たわたしを創造することができたはずだぞ！  
 これじゃ、まるでルンペンだ。

アダム これ以上、また、何がお望みだ！ おまえはわたし  
 と、まったく、そっくりじゃないか。

アルテル・エゴ それは、たしかに、そうだ！ わたしなら  
 まったく別の姿に、はるかに見てくれのよいわたしを造っ  
 ただろう。

リリット（小屋のなかから出てくる）アダムったら、どうして  
 あんなに叫んでいたの？

アダム わたしが？ わたしじゃないんだよ、おまえ——ほ  
 ら、見てごらん、リリット、うちにお客さんが来たんだよ。  
 どうする？

アルテル・エゴ こんにちわ、奥さん。

リリット フツ、その人、醜いわ！ なんの用なの？

アルテル・エゴ 失礼ながら、この方がわたしをこんなに見  
 苦しくつくったのです！ 私は抗議します。

アダム だけど、たしかに、君はわたしにそっくりだよ！

リリット そうだわ、たしかにあの人はずいぶん黒人だものね。  
 アダム どんな黒人だ？

リリット あんた、わたしに仕える黒人を造ってくれるって  
 言ったじゃない！

アダム 彼は黒人ではないよ、リリットちゃん。彼はね……

えーっと、彼は、つまり、なんと言うか……要するに、わ  
 たしの友人ということだ、わかつたかな？

アルテル・エゴ（ぶんぶん腹を立てて戻ってくる）ところでだ、  
 わたしはここで下男なのか、それとも何かなのか、いまこ  
 こでわたしははっきりさせておきたいんだ。失礼ながら、  
 これは基本的な質問だ！ そういう身分なら、わたしは基  
 本的に断る！

リリット でも、どうしてそんなに叫ぶの、アルテルコ？

アダム なぜなら基本的に話しているからだよ。親愛なる友  
 よ——

アルテル・エゴ その名称は願ひ下げにする！ わたしはい  
 かなる友人でもないのだからな！ わたしはあなたのため  
 なら、なんでもいたしましょう、リリット夫人。しかし、  
 あの男のためにはお断りだ。あなたのためなら何回でも水  
 を汲みに行きます。あなたのためなら世界中からなんでも  
 おもちしますよ。

アダム わたしもお願いする、どうかわが家の家庭内事情に  
 ついては干渉しないでいただきたい。

アルテル・エゴ わたしは何にも干渉していない。わたしは  
 ただ原則的に抵抗しているにすぎん。リリットの奥さん、

ねえ、リリットちゃん、彼はわたしの生き写しみたいに見  
 えなかい？

リリット いいえ、あなたはあたしのアダムよ。でも、あの  
 人は醜男だわ。あなた、あたしが好き？ あたしにキスし  
 なさい！

アダム リリットちゃん、よその人の前で——

リリット この人、なんて名？

アダム アルテル・エゴ。

リリット なんですって？ アルテルコ？ さあ、アルテル  
 コ、バケツをもって、水を運びなさい。

アルテル・エゴ（困惑する）わたしが……つまり……はい、  
 わかりました。（小屋のほうへ行く）

アダム リリットちゃん、おまえに注意しておかきやなら  
 んと思うんだが……つまりだ、彼にたいしてああいふふ  
 な命令をしてはいけないということだ。

リリット でも、あの人、ちゃんと言いつけに従ったわ！  
 アダム そうだな、でも、しなくてもいいことだ。彼は自由  
 な人間だ、わたしと同じにな、リリットちゃん。

リリット あんただって水を汲みに行くじゃない、そしてリ  
 リットちゃんの言うこと聞くわ。

アダム そこにはだね、基本的な違いがあるんだよ、おまえ。  
 わたしはおまえの言うことに従うことができる。なぜなら  
 わたしはこの主人だからだ、わかるか？ それにたいし  
 て彼はただの……。要するにおまえはもうすこし用心深く  
 彼と接しなければならぬ。

彼はあなたのために温かいお湯や、冷たい水を創造しない  
 のですか？ どうしてあなたはガス・コンロをおもちじゃ  
 ないんです？ それに、何らかの新しい世界というのなら  
 その程度のものももっているべきです。あなたは女奴隷の  
 ようにこき使われなければならないんですか？

リリット あなたのおっしゃるとおりだわ、アルテルコ。  
 アダム ナンセンスだ。言いなさい、リリット、何か不足で  
 もあるのか？ おまえは幸せではないのだな？

アルテル・エゴ だがな、ここでは幸福が問題なのではなく、  
 原理が問題なのだ！ 幸福なんかクソ食らえだ。いまここ  
 で問題なのは進歩とは何かだ！ リリットの奥さん、もし  
 わたしはその問題に堪えて何か言ってもいいということ  
 になれば、ここはまったく見違えるようになりますよ！  
 それで、あなたがどんな地位につくべきかということを考  
 えますとき——

アダム そんなことは自分のカミさんに言え、だが、そのこ  
 とに堪えては、わたしの家内はそつとしておいてくれ！  
 アルテル・エゴ どうして、そんなものがわたしにあるん  
 だ？ 一方は、妻も家も思い出もすべてをもっている。で、  
 他方はいええ、なんにもなし。これが、何か、平等と言  
 うものですかね？ 私はアダムがわたしを創造する権利を  
 もっていたということを基本的に拒否する！ それだけだ。

アダム 何がそれだけだ！ 待って——

アルテル・エゴ 真理はまたず。禁圧することもできず。  
 アダム だが、おまえに説明しよう——